

【聖書箇所】

ルカ 11:45 そこで、律法の専門家の一人が、「先生、そんなことをおっしゃれば、わたしたちをも侮辱することになります」と言った。**46** イエスは言われた。「あなたたち律法の専門家も不幸だ。人には背負いきれない重荷を負わせながら、自分では指一本もその重荷に触れようとしないからだ。

**47** あなたたちは不幸だ。自分の先祖が殺した預言者たちの墓を建てているからだ。

**48** こうして、あなたたちは先祖の仕業の証人となり、それに賛成している。先祖は殺し、あなたたちは墓を建てているからである。(クリック)

**49** だから、神の知恵もこう言っている。『わたしは預言者や使徒たちを遣わすが、人々はその中のある者を殺し、ある者を迫害する。』**50** こうして、天地創造の時から流されたすべての預言者の血について、今の時代の者たちが責任を問われることになる。**51** それは、アベルの血から、祭壇と聖所の間で殺されたゼカルヤの血にまで及ぶ。そうだ。言うておくが、今の時代の者たちはその責任を問われる。

**52** あなたたち律法の専門家は不幸だ。知識の鍵を取り上げ、自分が入らないばかりか、入ろうとする人々をも妨げてきたからだ。」(クリック)

**53** イエスがそこを出て行かれると、律法学者やファリサイ派の人々は激しい敵意を抱き、いろいろの問題でイエスに質問を浴びせ始め、**54** 何か言葉じりをとらえようとねらっていた。

## 1 69年目

今日は、横浜ナザレン教会、69回目の創立記念礼拝。1950年の12月第一週にさげられた最初の礼拝から69年目の今日、私達に与えられた聖書テキストは、ルカによる福音書11:45～54。今という時代に生きる横浜ナザレン教会の創立記念礼拝にふさわしいテキストです。なぜならば、このテキストこそ、主イエスが信仰共同体である教会に対し、教会に連なる者一人一人に対し、『いつも私において新しくい続けなさい』と呼びかけておられる言葉だからです。69年目の横浜ナザレン教会に連なるお一人お一人と共に、主イエスが今何を語り掛けておられるか聴いていきたいと思えます。

## 2 律法の専門家

今日のテキストの直前、ファリサイ人の家に食事に招かれた主イエスが儀式的なきよめを行わずに食卓についた事に、ファリサイ人は驚き不審に思いました。主は、ファリサイ人達が律法を形式的に守ることを重視し、肝心の神の愛と正義の実行を疎かにしている事を非難し、悔い改めに導こうとされます。しかし、そこにいた律法の専門家達の一人がイエス様に反論します。今日の聖書テキストは、そこからです。

律法の専門家とは、「律法学者」と呼ばれた人々。書物や口伝で伝承されてきた律法を解釈し、具体的に実行するようにと人々を教え導く立場の人々。ファリサイ人を教え導く立場にありました。ですから、主イエスが非難されたのは、彼らの弟子達の言動だったのです。弟子達を「不幸だ」と言われたのでその師匠が反論します。しかし、そこには弟子達への愛は感じられません。45節、「先生、そんなことをおっしゃれば、私達をも侮辱することになります。」—弟子達の言動よりも、自分達のプライドを傷つけた事を問題にしています。実際に彼らは社会で尊敬される立場であり、当時のユダヤ人社会の国会にあたる最高法院にも参加していました。現代で言えば国会議員のような立場の人が、部下たちを非難されて、「それでは自分達も貶められる」と抗議しています。

### 3 不幸だ！ウーアイ

だから、主イエスが「**あなたがた律法の専門家達も不幸だ**」と仰った時、律法の専門家達は更に驚いたことでしょう。「この男は、神の言葉を研究する専門家の我々に向かって、何ということ言うのか！」。怒り心頭であったでしょう。

先々週も話しましたが、この「不幸だ」と翻訳されている言葉、ギリシャ語は「ウーアイ」という言葉で、悲嘆や痛みを表す間投詞。「**あなたたちのことを考えると、私の胸は張り裂ける！**」と訳す聖書学者もいる程であり、決して相手に禍いを望む言葉ではありません。どうか過ちに気づいて欲しい、このままではあなた方は不幸になる、何とかして神に立ち帰らせたいたい…切なる主イエスの想いがこもった言葉です。

### 4 アベル

そして、この「不幸だ、ウーアイ」という言葉、旧約聖書の預言者がよく語る言葉でもあります。預言者は、神と人間の関係の中で重要な役割を果たしました。今日のテキストにもでてきます。50節「**天地創造の時から流されたすべての預言者の血」「アベルの血から祭壇と聖所の間で流されたゼカルヤの血に至る**」

ここに出て来る「アベル」は創世記4章冒頭、アダムとエバの息子のアベルです。皆さんもよくご存じの人類最初の殺人の被害者。「**この実を食べると神のようになれる**」と蛇に唆されたエバとアダムは、神様が「**食べてはならぬ**」ときつく命じられた木の実を食べ、神さまとの関係を決定的に壊してしまいます。そしてエデンの園を追放された二人が最初に産み育てた子どもの一人カインがその弟のアベルを殺します。何故でしょうか？

「**神はアベルの献げものに目を留め、カインの献げものに目を留めなかった**」と聖書は語ります。こう記すと神のえこひいきが殺人を引き起こしたようです。しかし、そうではありません。「**神が目を留められる**」というのは、人間の手の業が成功し豊かになったことを意味し、「**神が目を留められなかった**」というのは、失敗して貧しくなることを言います。農業に従事していたカインは一生懸命働いたにも拘わらず、その努力が報われなかったのでしょうか。一方羊飼いであった弟アベルは豊かになっている！カインは成功したアベルを激しく妬みます。私達の多くが経験する妬みではないでしょうか。カインはついに弟

を呼び出して殺してしまいます。私達人間は、様々な困難にあった時、これからどうなるのかと不安にかられるあまり、周囲の人を傷つけ罪を犯すことがありますし、うまくいっている人を羨み妬みます。「他人より自分がうまくいって当然だ」という傲慢に思い、「こんなことで大丈夫か？」と不安を感じる、そのような弱さが私達にあります。神から遠く離れている故の傲慢であり不安。神なき者の不安と傲慢に呑み込まれてカインは弟を殺してしまいます。アダムとエバの「自分達が神のようになりたい」という想いは、神から人を遠く引き離し、ついには殺人まで犯させる、聖書の描く私達人間の実像は、残酷なほどリアルです。

## 5 預言者

神はそのような人間達に繰り返し介入します。49節「神の知恵もこう言っている。『わたしは預言者や使徒たちを遣わすが、人々はその中のある者を殺し、ある者を迫害する。』」「神の知恵」とは、現代では失われてしまった書物だと言われていますが、ここでは、「神の知恵」とは、まさに神の御子イエス・キリストと読むことができます。神から遠く離れ、自分達を神とし、不安や弱さの内に憎み合い相手の存在を否定しあう人間達に対して、神は自分の言葉を聴き、自分のもとに帰ってきて、新しく歩みなさい…と、その時代に最もふさわしい人を選び、ご自身の言葉を託し、人々に語らせました。それが預言者です。

預言者の言葉を受け入れた人もいましたが、圧倒的に少数でした。大多数が自分達に語り掛ける神の言葉を見向きもせず逆らいます。何故なら、神の言葉は、人間には都合なので。「不幸なるかな、ウーアイ」と人々の罪を指摘し、悔い改めを迫る、方向転換を迫る、新しく生きなおす事を迫るから。人はだれしも、自分達は間違っていない、正義だと思いたがり、変わることを拒みたい者です。「神のようになりたい」というアダムとエバ以来の変わらぬ思いが私達人間の根本にあるからでしょう。だから神から送られてきた預言者達を迫害し、殺し続けるのです。

51節に「ゼカルヤの血」とあります。ゼカルヤは、歴代誌下24章に出て来る祭司です。経済的繁栄をもたらしてくれるという偶像を、欲に目がくらみ神として拝むようになった人々。彼らに「不幸なるかな」と神の言葉を告げたゼカルヤを、当時の権力者達は、こともあろうに神殿の庭で処刑した出来事が書かれています。主イエスの時代の聖書は、「歴代誌」で終わっていたらしいので、ゼカルヤは、旧約聖書最後の殺人の被害者。つまり「アベルの血からゼカルヤの血まで」というのは、聖書の初めから終わりまでを通して「神に立てられた信仰者の故に殺された人々」を指します。神に立てられ、神に遣わされた人々は、天地創造のその時からずっと人々に拒まれ、殺され続けている、聖書は神に逆らい続ける人間の姿を赤裸々に描いています。

## 6 律法の専門家が預言者殺しの責任を問われる？

この歴史を踏まえ、主イエスは、律法の専門家達に向かって、「あなたたちは不幸だ。自分の先祖が殺した預言者達の墓を建てているからだ。」と仰います。主イエスの時代

には、「義人〇〇の記念碑」として預言者の墓が盛んに建てられ、人々の巡礼地となっていたようです。にも拘わらず、イエスキリストは、何故、何代も前の先祖の罪をもって、その子孫である預言者達に「不幸だ」というのでしょうか。

それは、主イエスと同時代の律法学者達も、預言者達を殺してきた先祖と本質的に変わっていないから。古いままだからです。もし、彼らが預言者を殺した先祖の行いを本当に悔い改め、神に立ち帰り、神の言葉を新たに聴こうとしていたのなら、ファリサイ派の人々が主イエスに厳しい言葉を投げかけられた時、真っ先に「彼らにそう教えたのは私どもです。私どもこそ、神への愛と正義の実行に欠けていました。悔い改めます」と答えたでしょう。しかし、彼ら律法学者達は、彼らへと語り掛ける主の言葉を聴こうとせず、自分達のあり方を変えようとはしませんでした。

## 7 律法

主イエスは、そんな彼らの様子を見て、「人々に背負いきれない程の重荷を負わせるが、自分達では指一本でもその重荷に触れない」と仰り、また言います。「あなたたち律法の専門家は不幸だ。知識の鍵を取り上げ、自分が入らないばかりか、入ろうとする人々をも妨げてきたからだ」律法の専門家が、聖書にある神の戒めや先祖から伝わる律法を沢山の規則に細分化して、「これらの規則を守らなくては救われない」とした事、そうして、真実の神を人々から遠ざけ、神を知ることがないようにしている…と主は指摘しています。

神の民が大切にされた神の戒めは、その背後に神の慈しみが、神の恵みがあります。その神の恵みが人々の生活の隅々までいきわたり、人々が神を深く知り、神との深い関わりを持ちつつ生活する為に神は律法を与えられたのです。律法とは、本来、神によって救われた民に与えられた戒めで、人は「神ではなく、神に愛された被造物である」ということを人が深く弁え、神の慈しみと恵みの内に生きる為の規律であり、人を裁くためのものではありません。「これを行えば救われる」というような救いの条件でもありません。

しかし、律法が神より与えられてから時代が経ち、人々は神の戒めの持つ意味を見失います。神の戒めを、「守れない人々は罪人であり、守っている我々こそ神の民」と、人を審く事に使いました。何故なのでしょう？

彼らは強国の支配が続く中、自分達の民族のプライドを守るため、「神の恵みは自分達だけに与えられたもの。我々こそまことの神の民であり、他の人々は違う」と考えるようになりました。そうして「神の恵みは自分達が所有し自由に処理できるもの」という大きな考え違いをするようになり、その時その時に応じ新しく語り掛けられる神の御言葉を聞く事をやめてしまいました。神から遠く離れてしまい、人間の声と神の御声の区別がつかなくなります。自分達の腹を神として生きるのです。

## 8 罪の行きつく果て

そんな彼らに主イエスは、預言者を殺した彼らの先祖たちの姿を見出します。彼らの先祖たちも、神の声を聞こうとせず、預言者を殺しました。そして律法の専門家達も、神

の声ではなく、人々の声を聞き、彼らに気に入られるため、大衆に人気のある預言者の墓を建てて正義を行っているつもりでいます。墓は建てるのですが、預言者のように自分達の時代に語り掛ける神の言葉に耳を傾けようとはしません。古いままです。そんな彼らが、昔の預言者の時代に生きていたとしたら、預言者達を殺しており、先祖たちが、イエス様と同時代に生きていたら、預言者達の墓を建てていたでしょう。神から見れば、主イエスから見れば、先祖も子孫も同じことをしているのです。神によって新たにされる事のなかった彼らが主イエスを十字架にかけます。最大の預言者、預言者以上の者、神の独り子を十字架にかける。人間の罪が極みに達します。罪の深まりとともに、「あなた達は不幸だ、ウーアイ」と罪を嘆く主イエスの悲しみも、父なる神の嘆きも深まっています。

## 9 私達も

しかし、私達も彼らファリサイ派や律法学者達と違う…と言い切れるでしょうか。私達は、時として、自分達の正しさを主張する為に、罪人を求めることがあります。「あの人は〇〇した、▽▽もした。でも自分達は違う。そんなことはしない」と他者と比べての自分の正当性を主張する事、度々です。時には排斥してしまう事さえあります。人間は他人を非難している時、自分は正義の人でいられるから、神の座に座っている思いになれるからでしょう。こうして、イエス・キリストの体である教会が何度となく分裂してきました。

教会だけではない。人生の困難に襲われた時、私達は、神に立ち帰り祈るよりは、このような困難を自分にもたらした犯人捜しをしようとしています。人間は弱いものです、自分の罪を受け入れるよりは他人の欠点を見ている方が楽なのです。そして傷つけ罪を犯す。人は弱く、不安と傲慢をあわせもち、被害者が容易に加害者へと変わります。そんな私達が造り出す世界は、抱えきれない程の多くの問題に満ち溢れています。

「ウーアイ、なんと不幸なことか。胸が張り裂けるほど悲しい」という主イエスの嘆きの声を、「そうだ、言っておくが、今の時代の者達は、その責任を問われる」という主イエスの糾弾の声を、今、遜って新たに聞かなければならないのは、律法学者やファリサイ派の人々ではなく、今を生きている私達一人一人。責任を問われるのは誰か？「そうだ、言っておくが、今の時代の者達はその責任を問われる。」主イエスが私達一人一人に責任を問うておられます。神になろうとする人間の罪は、神が造られた美しい被造世界を、被造物どうしの関係さえも壊しています。その罪の責任を、私達は負わねばならないのは当然でしょう。私達人間は、自分達が神になりたがる以上、まことの神に滅ぼされてもしかたがないのです。滅びしか私達人間が責任を取る道はない…誰も滅びたくはありません。神に敵対するしかありません。なんという重荷を私達は担っていることでしょう。

## 10 イエス・キリスト

しかし、主イエスは全く異なる道を示してくださいました。それは、「ウーアイ、不幸な

者達、私は胸が張り裂けるほど悲しい！」と深く嘆きつつ、私達に問うた責任を一身に背負うて十字架に磔にされる主イエス、そして三日後に甦り、「あなた方に平安あれ」と仰った主イエスの中に見えて来るものです。深い背きの中にある私達一人一人を、ご自身以上に愛しぬく主の姿から見えて来るものです。「そうだ、言うておくが、今の時代の者達はその責任を問われる。」と仰った主イエスは、ご自分を殺そうとする私達を父なる神に弁護してくださるのです。「父よ、彼らをお赦してください。彼らは何をしているのか知らないのです。」と。そうです、主は、自ら、「今の時代」の者達の代表となってくださった、今の時代の私達の罪を負うてくださった。自分の潔白を主張するために、他の人を裁き、責め、罪人をつくり、「悪いのはあいつだ」と言う私達なのに。ただ一人、まことに罪のない方は、私達とは全く逆のこと、ご自身を殺そうとする者達の為に、ご自身が罪人となり、責任を負うて十字架についてくださった、私達が受けるべき滅びという大きすぎる重荷を肩代わりしてくださいました。父なる神はその為に、御子を人々の間に宿らせました。ここに私達が人間として生きる希望があります。この希望を必要としない人は、誰一人いません。

この十字架と復活の主イエス・キリストのみが、私達を新しく造り変えることができます。このお方を自分の救い主と受け入れれば、見えない御子イエス・キリストが私達の内に住んでくださるからです。敵をも愛する圧倒的な愛のうちに、神の子とされるのです。それは一度限りの出来事ではありません。私達は、生きている限りにおいてずっと、神の子とされ続けます。どのようにして？

神に祈り神の言葉を聴き続け、新たにされ続ける事で。傲慢と不安のうちに揺れ動きつつも、主イエスに、父なる神に助けを求めて叫ぶと、神はいつも新しく私達に語り掛けてくださり、新しい道を与えて下さいます。先ほど共に読み交わした詩編119:130節には「御言葉が開かれると光が射出で／無知な者にも理解を与えます。」とありますが、文語の方が迫力があります。「御言葉、うち開くれば光が射出で、愚かなる者をも聡からしむ」。父なる神の言葉が光を放ち、その時その時に応じてご自身に対する知識を与え、私達を大きく変え続けてくださいます。だから、パウロは第二コリント書でこう宣言していきます。「わたしたちは落胆しません。たとえわたしたちの「外なる人」は衰えていくとしても、わたしたちの「内なる人」は日々新たにされていきます。」(コリントⅡ4:16)。キリストの霊を通じて神の御言葉によって新たにされていく者達こそ、神を知らぬこの時代に神からの御言葉を語る預言者と言えるのではないのでしょうか。

## 11 新しくなり続ける

横浜ナザレン教会もそうです。教会に連なる一人一人が祈りつつ、神の御言葉に耳を澄ましつつ歩み、聴きとった神のみ言葉を、教会の外の人達に伝えていくことで預言者となり続けるキリストの体です。神の恵みを、律法の専門家達のように自分達のものだけにしてはなりません。69年前、喜田川広先生は、「焦土と化した横浜に神の福音を宣べ伝え、希望の火を灯しなさい」という神の呼びかけに答えて、京都をあとに、横浜に来

られました。神の御声から始まって70年目、私達の目の前に広がる横浜に当時の面影はありません。しかし、そこに住む人々の内実は、あい変わらず罪に苦しみ、飢え渴いています。だからこそ、この教会の務めはまだ終わっていません。今日から始まる70年目、のこりの70年も、神の御声に耳を澄ませ新たにされゆく教会として神に託された務めを果たしていきたい…と切に祈り願います。